



六花 5

俳句雑誌りつか
2018 (平成30年)
cover design ichigo

山田六甲

篠山城

道

空井戸の闇覗き込む背に蝶
残花かな篠山時雨まで染めて
徒町の屋根葺き替ふる日照雨かな
日の沈む方が徒町八重椿
残鴨菖蒲の芽より飛び出しぬ
花筏北北西へ寄せ手かな
薬は降る時を待ちけり雨の中
残花冷え篠山ハワイアダンス
田楽に顔を汚せる丹波の子
傘を忘れて黒豆おこは花嵐
デカルトカントショーペンハウエル百千鳥

花馬酔木敷居の高き喫茶店
城垣の苔むし明日は仏生会
献灯に傘は残花の薄明かり
枳殻からたちの花より棘に触れたしよ
花床几野点所望の気もあらず
濠へ身を乗り出してをり花通草
風よりも花にさらはれさうな貌
濠の水暗渠へ落つる残花かな
花筏一度切れしが繋がりぬ
方円の濠に随ひ花筏

雪雲の城なき城を覆ひけり
をしどりのひよいと乗りたる浮氷
白鳥の一羽となりて乱れけり
東の間の川はきららに雲凍つる
追焚きに新しき柚子加へけり
少しづつ窓辺を移し室の花
寮監の部屋に集へり春時雨
ふるさとの一級河川鳥帰る
鳴り物の一つはいづく雛飾る
わが齡母に重ねて梅白し

高華抄

煮凝

佐津のぼる

咳こんで服薬の白湯こぼしけり
古コートいのちの末の身を包む
春遅し採血あとの結果知り
着ぶくれて昨日につづく無聊かな
煮凝のつめたく舌に溶けゆける
地震あとの癒えぬ傷口隙間風
着ぶくれて吾が老いざまのあからさま
グランドの叱咤いつまで寒夕焼
寒鯽の背に見る氷見の海の色
日かげりて春は名のみと思ひけり

降る雪や帰り仕度に熱いお茶

篠原敬信

冬空や魚影の消えし海の底

あはれ散りやがて寄り添ふ群雀

冬ぬくし木立の影が芝に有り

幼子の手を引く如く蕪引く

降る雪や帰り支度に熱いお茶

ふるゆきやかえりじたくにあついおちゃ　しのはらけいしん

しんしんと雪の降る中を帰って
ゆくのに、熱い茶を一杯飲んで
から、というのは、もてなす側
か、もてなされる側かは句の表に
出ないが、もてなす側の茶であ
ろう。お茶一杯で帰宅まで温もり
が持つわけでもないだろうが、寒
いから気をつけて、という思いや
りが何よりの温もりなのである。

雪卿集 せつけいしゅう

志方章子

升田ヤス子

水仙を嗅いでをりたる羅漢仏

川原湯や雪山の服脱ぎ置かれ

冬天や彼の世に近く鳶飛べる

一枚の地面昇きある霜柱

川裾に水の揉み合ふ春隣

かがよひの捻れてゐたる若布干す

川音のたぎつ旅寝や春浅し

干しわかめ紙の音して仕舞はるる

春隣藤田嗣治の耳飾

駒返る草に忘らるべビー靴

川石をめくれば雑魚や春寒し

芽出し雨軒にトレモロ奏でをり

大寒や川に温泉湧き出でぬ

玄関の予後よき話風信子

芽キャベツのほろりと苦き春隣

芽柳や一糸一糸に風あそび

永田万年青

藤生不二男

福豆を子と分ちあふ翁かな

竹林に風の出でたる笹子かな

冬川の外灯揺らぎをりにけり

春の雪作務衣の背なに降りにけり

冬ざれの岸に一輪花咲ける

大根の畝に残りて莖立てり

寒月にトランクの音遠ざかる

岬には灯台ありて春の潮

杖の音響いてゐたる寒月光

雛の日のあかるく暮れてゆきにけり

寒月を見上げて一人帰りけり

雛の間に影現はれて失せにけり

シクラメン手紙を妻に書きし頃

ゆく先の果に海あり雪解川

紅梅の艶やか咲きに誘はるる

春泥や己蔑む日のありぬ

出口 誠

夕闇のライトを受けて春の雪

春の昼妻のいびきのひびきをり

薄き雲通して見ゆる春の月

雲一つ無き空に浮く春の月

まどろみて春のこたつの魔力かな

春ごたつ我が身体に食らひつく

トイレへと行く決心の春ごたつ

戻りなばやはり暖か春ごたつ



雪樹集

谷口 一献

赤松有馬守破天龍正義

凍鶴の右脚一本川に刺す
薄氷の水面を滑る羽音かな
春立つや君と歩く水無川
筆立に書けるペン減り冴返る
恋猫の時に哀しき貌をせり
うららかや釣銭で手を握らるる

廣畑 育子

むつの花川へと続く海鼠壁
わが村の田畑溝川薄氷
角の店柵の枝を桶一杯
夕千鳥川風強くなりをりぬ
でびら売る鞆の細道石畳
常夜燈北吹く鞆の舟溜

水脈曳いて寒の尾道暮れにけり
尾道の寒夕焼けやドック入り
大橋の落暉の中を雁帰る
雪催珈琲たてて引きこもり
猫がゐて人影まばら建国祭
芹洗ふ鼻歌聞こゆ河原かな

平居 濤子

早春の川道草をして海へ
川流る莖立つものの向かふ側
菜の花の鉢を並べて忌を修す
墓碑名に同姓多し梅の里
犬小屋の屋根にも薄く雪積る
木と化せるベンチに芽吹くものあり

住田千代子

残り福めでたく餅を拾ひけり

はかなさの土の花なり霜柱

薄氷に昨夜の風の声を聞く

臘梅の乾きに雨の雫かな

反り返へる松の膚や冬の色

寒風に押されてちぢむ歩みかな

溝渕 弘志

氷点下されど山茶花凜と咲く

散歩道春泥懐かし小雨かな

シクラメン店いつぱいに溢れけり

小雪舞ふ足湯浸かつてをりにけり

梅咲いて人目気にせず踊る人

落椿掃かずに置かむ見とれけり

田尻 勝子

何処より穫れし我かな春の月

常緑樹吠え唸りたる春嵐

高層の黄砂に明けより捉はるる

立春車椅子の少年咆哮

春嵐地の揺れ身の飛ぶ丘の町

動くものあらざりからつと寒の川

延川五十昭

春節の鯉に餌をやる父娘かな

猪の戸を打つ朝や天上寺

裸木を透けて夕日のしづみけり

紅梅に染まりてゐたる処女塚

梔子の実の散りゐたる太山寺

梔子で染めてもらひぬ春シヨール

螢雪譚



山田六甲

卯月作品から

雪嶺抄

雪雲

笹村政子

雪雲の城なき城を覆ひけり



城跡が雪雲に包まれて見えな
い状態を、詩情をもって「城な
き城」といい、謎めいた表現を
漂わせている。兵庫県で云えば
雲海の城で有名な武田城跡。神
戸から車で2時間ほどで行け
る。この辺は冬は積雪が美しく、

思いついたらひよいと足をのほ
せる良いところだ。政子の住む
所は明石海峡が望め、病院が隣
りにあるしすごく便利な場所。
幸せな人である。

をしどりのひよいと乗りたる浮
氷
政子

浮氷とは春の薄氷（うすらい
・うすごおり）のこと。オシド
リが薄氷に軽々と乗った。一羽
ならまだしも、番（つがい）で
乗るもんだから、パリッと割れ
て沈む、それを繰り返して乗っ
て、まるで面白がって遊ぶよう
に歩くのである。遊びをするの
はヒトだけかと思ったら、動物
も鳥も遊びはするのである。こ
れは明石城の濠での光景。「皆
さーん、この濠は、あの女流俳
人政子がオシドリの句を詠んだ
場所ですよ」と将来観光客に説
明されるようになる。

凍鶴の右脚一本川に刺す

谷口 一献



凍鶴とは厳寒に立つ鶴のこと
で、身じろぎもしないで片脚で
立ち首を身体に埋めている鶴
で、それだけで孤高さと寂しさ
を感じる。だが、右足を冷たい
川に入れてゐるのを観ると、右
脚から左足に向けて鶴の身体
の中を電流がぐるぐる流れてい
るのではないかとさえ想像するの
は主宰だけか。作者の意図は普
通に立っているだけでも寒いの
にさらに片脚を水に浸けている

のだから鶴の気持のバランスが
壊れて芯まで冷えているのでは
ないだろうか、哀れんでいる
ところであろう。その通りであ
る。惜しむらくはこういう場面は
沢山詠まれてゐる。一献なら、
ここで身体を温める為に熱燗を
ぐっと一献、と干したいところ
だろうが、日本酒は却って冷え
る。

薄氷の水面を滑る羽音かな

一献

羽音は薄氷に乗った鳥が水を
割らないように羽ばたきながら
歩いている光景で、鳥にとつて
も氷が割れて水に墜ちるのは嫌
だろうから、おそるおそる歩く
のであろう。これを薄氷を踏む
思いというのだろうか。ところで
Rこう会の吟行で濠の薄氷を観
たとき、一献が居たかはわから
ない。想像力を働かせて詠んだ
のかも知れぬが想像力を働かせ

るのは俳人として充分な素養が
あるということである。

春立つや君と歩く水無川 一献

水無川(みずなしがわ)は、

増水時には水が流れるが、通常
は伏流水になるなどして地表を
水が流れない川のこと。その水
のない川にも春が来て、雪解け
水で潤うのだよ、君と歩いてい
ると川は潤って今にも春の水が
流れそうだよ、というのだろうか。

君と歩くというのは作者にと
つて特定の人を言ったのでな
く、読者に特定の人を当て嵌め
て味わってくださいたいと言っ
たろう。

筆立に書けるペン減り冴返る

一献

筆立てにペンはぎっしりとあ
るがその内現役で書けそうなも
のは随分減ってきた。インクが
固まったり、書いて減ったりで、
使えないペンを、何か愛着があ

って捨てきれない。つまりペン立てに残っているのは情が移った物ばかりなのである。

恋猫の時に哀しき貌をせり

一献

恋猫であるときにはなく、恋猫が時折何か哀しげな顔をする心配している。谷口家の玉三郎が、もしかしたら隣のチヨマちゃんにフラれたのであろうか。ついこの間「うるさい」と叱ったことを振り返って、可哀想なことをした、もっと励ましてやれば良かった、と悔やむのである。人も猫も成就しないときは大いに哀しいものである。主宰なら屋根の上から投身する。一献の優しさがよく出ている作品。

うららかや釣銭で手を握らるる

一献

春の陽気に誘われて、市場の

おばちゃんが「ありがとう」といいながら釣り銭を渡す手で同時に手を握ったのだ。一献ちゃん男前、と手に物を言わせたのである。「モテる男は違つ、主宰なんか、釣り銭を投げるように渡される。それが嫌で、「釣りは取っときな」と言つ。「何言つてんのよ、丁度じゃないの、冗談は頭だけにしときな」と叱られる。「小梅太夫！」



むつの花川へと続く海風壁

廣畑 育子

むつのはな、とは六花、つまり雪のことで、海風壁ですぐに想起するのは倉敷の景観地区・広島の新浦など。土蔵などに用いられる、日本伝統の壁塗りの様式の一つ。その壁をも指し、生子、海風、なまこともいう。壁面に平瓦を並べて貼り、瓦の目地（継ぎ目）に漆喰を蒲鉾形に盛り付けて塗る工法によるもので、目地の盛り上がった形がナマコ（海風）に似ていることからその名がある。（『ジャポニカ百科事典』松竹映画美人三姉妹の出来来そうな場面。神戸では神出の三美人が有名だが、加古川では尾上の三美人でその一人。雪のちらつく酒蔵の町を赤い番傘をさして歩く景色は眩しくて目が潰れそうだ。最近はお痩せになって。

わが村の田畑溝川薄氷 育子

今住んでいる土地を襲めてい

胸に火が点ったかのごとく。

舟溜と書いたのは、さほど大きくない漁船の係留してあるところだから。昔は鯛が沢山とれて、良質の真鯛を塩釜焼きにした「鯛の塩釜焼」の土産があったが、今は長崎だけになってしまったのであろうか。

赤松有馬守破天龍正義
水脈曳いて寒の尾道暮れにけり



この人は育子と別行動ながら偶然同じく広島県に行った。尾道へ。というか尾道へ行ったときのことを思いだして詠んだのだらうか。尾道は文學の町で、

長崎よりも足腰が強くなる。また、湾内を望むいい居酒屋もあり、そこから夕暮れの湾内を見ることが出来る。船の水尾が夕暮れの光りの中に寒さを払っているように思えたのであろう。鏡のように風が寒の一湾がすでに詩である。そこを言いとめた。固有名詞が句に生きているかどうかは常に問題になるが、難しいところである。しかし、深く入り込んだ湾内に船の水脈引く光景はたしかに尾道らしい。

尾道の寒夕焼けやドック入り

赤松有馬守破天龍正義

この句も尾道でなく相生でもなりたちそうだ。がそういっちゃお仕舞いよ、というのは赤松の寅さん風口癖だから、まあいいか。ええことあらへんわい！

大橋の落暉の中を雁帰る

赤松有馬守破天龍正義

大橋というのは全国至る所にある。が、この場合おそらく明石大橋かと思う。落暉というのは入り日、夕日、落日のこと、赤く大きく見える。

その落日を背景に雁が棹を組んで飛んでいる。北国へ向かっている光景。やや綺麗すぎる嫌いはあるが、絵になる光景であるのは間違いない。その開ける雁の中には帰れない者もいて哀れだから、余計に美しい。

雪催珈琲たてて引きこもり

赤松有馬守破天龍正義

雪もよいの中、珈琲をたてて引きこもるとは羨ましい。彼は料理も上手で、ときどき息子さんを庵に呼び、餃子パーティーをするという。やさしいお父ちゃんである。珈琲くらい朝飯前で、その珈琲を一度くらい、句会に持参して主宰に振る舞うのも罪にはならないと思うのだ

六り花っ集か
集し



五月到着順

小林はじめ

春星に願ひ託して至福かな
名の星は春らしくあり天占むる
東風の訪ふ汐の香満ちる旅の宿
生けるものみなに積みたしぼたん雪
ハルマゲドンてふてふに娑婆捧ぐかも

大内 幸子

自動ドアー雪連れて来るミニ喫茶
蹲ばひの氷りて猫はあとずさり
冴返る太陽のやうな町医逝く
唐突な朝の別れや三寒す
一時帰国先づは庭芝焼きにけり